

【曲目解説】

●歌劇「ウィリアム・テル」序曲（ロッシーニ）

非常に有名な序曲ですが、実は海外のサイト、たとえば譜面ダウンロードサイトで有名な IMSLP でウィリアム・テルだから W で探しても見つかりません。実はこの曲の正式名称はフランス語のギョーム・テル、つまり G から始まります。物語は誰もが知っているもので、14 世紀末スイスは、オーストリアの悪代官の圧政に苦しめられ、代官の帽子にすらおじぎをさせられているところ、伝説の英雄ウィリアム・テルはこれを無視したため、罰せられそうになりますが、息子の頭にのせたりんごを弓で射ることができれば許してやると言われ、見事に成し遂げました。しかし矢を 2 本持っていたことを咎められ、もう 1 本は代官を打つためだと答えたために捕えられますが、なぜか逃れることができ、やがてスイス人民による独立運動につながっていきます。

さて序曲ですが 4 部構成です。第 1 部「夜明け」はチェロの五重奏で奏でられます。ディマンシュのような室内管弦楽団ではそうたくさんチェロ奏者はいません。今回も 4 人です。それでは、本日どのような演奏スタイルになるか、ご注目ください。第 2 部の「嵐」に引き続き、第 3 部は「牧歌」。フルートとコーラングレ（イングリッシュホルン）のソロです。コーラングレは、オーボエより 5 度音域の低い楽器で、とても素朴、牧歌的な音色です。第 4 部は、クラシックから映画、テレビ番組までさまざまにパロディでも用いられるトランペットの華やかなファンファーレから始まる「スイス軍の行進」。クラシック音楽の中でも指折りに有名な曲です。

ロッシーニは、この歌劇を 37 歳で作曲した後、40 年近くの残りの人生を、創作料理やレストラン経営に費やしました。途方もない音楽の才能を持った人なので、円熟した年代にせめて室内楽でもよいから、もっと多くの曲を作曲していただいたなら、後世の我々アマチュア演奏家の楽しみがもっと増えたのにと、他人の生き方に茶々を入れるつもりはないにしても、ちょっと残念な気がします。

参考：ウィキペディア
(TY)

●交響曲第 100 番「軍隊」（ハイドン）

当団がハイドンの交響曲を採り上げるのは 3 回目です。1983 年第 12 回のとき 104 番「ロンドン」、1991 年第 28 回、92 番「オックスフォード」、そして 23 年の空白を経て今回の「軍隊」。小規模な室内オーケストラとして長い歴史を持ち、かなりマニアックな交響曲も採り上げる団体としては、104 曲中 3 曲とはいかにも少なく、現在のメンバー存命中に手掛けられるのはあと何曲？ ハイドン・ファンの筆者としては残念な限りです。何故これほど人気がないのか？「交響曲の父」と呼ばれ、音楽の授業では必ず試験に出るアカデミックさ、山のような数の作品群、モーツァルトに比べると、うっとりするようなメロディーやドラマチックさもない、どれも同じようで教科書を読んでいるよう…、こんなところでしょうか。

しかしそこを抜けると別世界が広がっています。ハイドンにはまっている世界的な演奏家は沢山います。指揮者では、セル、クレンペラー、ザンデルリンク、C. デイビス、ブリュッヘン、プレヴィン、そしてあのラトル。東京クァルテットを始め、古今の名弦楽四重奏団、ピアノのリヒテル、ブレンデル、A. シフ等々。

こういう名人達を惹きつける魅力は、なんといっても、雲ひとつない青空のような明晰さ、どこから見ても完璧なバランスを保ち、それでいて上質な温もりを持ったハーモニー。これらをベースにして絶妙な明暗、コントラストの変化が展開されます、まるで、太陽が雲に隠れ、景色がさった暗くなった時、あるいは暑い日に木陰に入り、ひんやりした涼しさを感じた時のように。

さて、本日演奏するのは、104 曲の中で最も人気の高い交響曲の 1 曲、第 100 番「軍隊」。ハイドン最後の交響曲群、12 曲からなるザロモンセットの 1 曲です。彼の、この分野での集大成と言える曲で、中でも第 2 楽章の後半に軍楽隊を思わせる大太鼓、シンバルなどが入った華やかな作品で、特に親しみやすいものと言えるでしょう。ト長調という調性が、前述のハイドンの魅力を遺憾なく発揮していると思います。

どうぞ居眠りなさることなく、お楽しみ下さい。皆様方の反響によりましては、珠玉の交響曲群への 4 回目の演奏チャンスが訪れると思いますので。

(T. S.)

●交響曲第3番「スコットランド」(メンデルスゾーン)

1829年7月30日、イギリスを旅していたメンデルスゾーンはスコットランドの首都、エディンバラのホリールード城を訪れます。古城そばの廃墟と化した修道院跡に佇んだとき、彼の脳裏には、かつてその地で暮らしたメアリー女王や、その恋人となったため惨殺されるに至ったリッツィオの数奇な運命が浮かび上がりました。交響曲冒頭の楽想はそのとき生まれたのですが、速筆のメンデルスゾーンには異例中の異例で、10年もかかって完成に漕ぎつけ、交響曲としては最後の作品になったのでした。

出版にあたり、メンデルスゾーンは有名なヴァイオリン協奏曲と同様、楽章間で音楽を中断せず、続けて演奏するよう指示しました。切り分けることのできない全体として作品を聴いてほしいと望んだのです。

第1楽章序奏の冒頭、ヴィオラとオーボエが奏でる幻想的なテーマは曲全体の基調となっており、聴く者を古の世界に誘います。第2楽章では、バグパイプに見立てられたクラリネットがスコットランド民謡調の主題で、勢いよく駆け抜けていきます。ここには生命力と希望に満ちた青春が息づいています。第3楽章は弦楽器のピチカートに乗って情感あふれる旋律が拡がり、愛することの喜びと苦しみ、そして、避けることのできない運命が語られます。第4楽章は激しさと哀しさが織りなすドラマチックなフィナーレです。後半狂乱の嵐が鎮まると、クラリネットが切ない愛のテーマを静かに奏でます。それに応えるようにファゴットが和し、そして消え去ります。一転、最後は恐ろしい運命に救いをもたらされたかのような、またメンデルスゾーンが目にしたスコットランドの繁栄を描くような、コラール風のテーマによって壮大に締めくくられます。

ところで、この解説を書き始めた私の脳裏には瀧廉太郎の「荒城の月」が浮かんできました。「古城」や「廃墟」からの単純な連想でしたが、この歌が「スコットランド」冒頭のテーマと似ているように思えてきました。調べてみたところ、なんと彼はメンデルスゾーンが開校したライプツィヒ音楽院に留学していたのです。「荒城の月」作曲は留学前ですが、もしかしたら夭折の天才作曲家、瀧も「スコットランド」を聴いて感激したことがあったのでは…と、つい想像してみたくくなりました。

(KAORI)

【アンサンブル・ディマンシュ メンバー】

第1 ヴァイオリン;	石嶺寿子	菊池和俊	三瓶政一	関根佳子	♪時山響子	町田めぐみ
第2 ヴァイオリン;	荒川奈月	長澤 澄	西村 実	松島和彦	*森 未知	
ヴィオラ	; 柴野かおり	下山純也	*関口孝司郎	山口 彰		
チェロ	; 緒方 淳	*佐藤 翔	三次摂子	山内美佐子		
コントラバス	; *須賀敬亮	林 和巳	廣永 瞬			
フルート	; 徳植俊之	福田重徳				
オーボエ	; 市川亜理	山口高司				
クラリネット	; 浅井昭成	金子千暁				
ファゴット	; 越島康太郎	吉澤輝彦				
ホルン	; 伊藤千尋	小磯 治	町田明子	森合利之		
トランペット	; 多賀亮介	武川奈央				
トロンボーン	; 新井恵美	桜田健彦	佐藤美緒			
ティンパニ	; 星野武徳					
パーカッション	; 小森莉名	近藤よしの	藤原拓海			

♪ コンサートマスター

* 弦楽トップ